

*** 70mm バンベルヒ子午儀発見 (実は2007年10月23日のこと)**

アーカイブ室新聞105号に「30mm バンベルヒ経緯儀発見の記事」を書いた。その30mm 経緯儀発見は2008年1月11日であった。今回の70mm 子午儀発見は2007年10月23日の事である。なぜ、今になってこの1年も前の2件の発見記事を書いているのであろう。実は、この30mm バンベルヒ経緯儀と今回の70mm バンベルヒ子午儀は、ある歴史上の大きなイベントに加わっていた可能性が出てきたのである。その大きな出来事については項を改めるが、その記事を書くに当たっては、その大きなイベントに、この30mm バンベルヒ経緯儀と70mm バンベルヒ子午儀が登場し、そのためには発見記事が必要なのである。

この2つの歴史的に貴重な古い観測器械の発見はアーカイブ室発足前でもあり、またアーカイブ室新聞発行前でもあったので、これらを発見したニュースが書かれていない。後の記事でこれらの器械について参照するには記事にしておく必要がある。

2007年10月頃、国立天文台の北西方向の森のなかにある基線尺倉庫を「お宝探し」で漁っていたのである。そこでたくさんのお宝を発見した一つが今回の70mm バンベルヒ子午儀であった。発見されたときの様子が写真1である。



写真1 黒革張りの木箱の中に入った70mm バンベルヒ子午儀を発見した筆者

アーカイブ室新聞105号の30mm バンベルヒ経緯儀については、それが使われた様子を知る文献も情報も全く無かったのであるが、この70mm バンベルヒ子午儀は東京天文台報にも登場するし、大正15年に発行された最新科学講座第2回配本の中の水野良平氏の「天文台」

という記事にも写真が登場する。そして何よりもこの70mmバンベルヒ子午儀は「光電子午儀」開発実験に使用された子午儀でその写真が残っている。

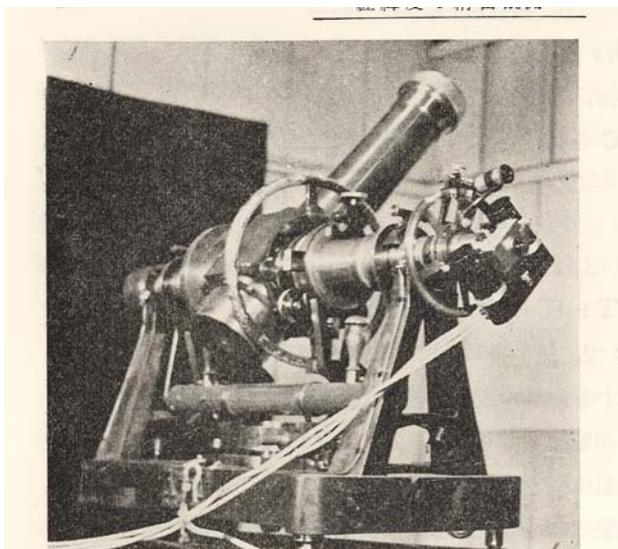


図 7.5. 光電子午儀

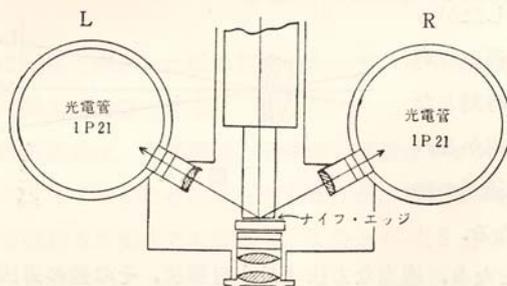


図 7.6. 光電接眼部

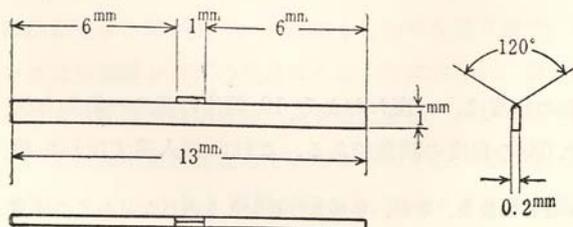


図 7.7. ナイフ・エッジ

写真2 光電子午儀開発実験の記事

発見された70mmバンベルヒ子午儀は、新たな挑戦が試みられたため、原型を留めてはいない。それでも神々しいばかりの重厚さがあるのである。

この70mmバンベルヒ子午儀を発見した際の調査隊のメンバーは、入江誠、佐藤英男、筆者の中桐の3人であった。そのとき発見したものは、現在の子午儀資料館（レプソルド子午儀室）に運び込んである。これらについてもそれぞれに発見記事を書いておかなければ、後日、これらが何であったか判明した際の参照記事として必要である。その多くは、アーカイブ室新聞第86号の「子午儀資料館展示品のまとめ」に写真が照会してある。

研究者は、常にいつの時代でも新しい手法を考え研究を進めようとする。昭和32年(1957年)頃、国際地球観測年(IGY)事業の一環の一つとして光電管を用いた光電子午儀の研究が天文時部の虎尾正久教授を中心としたグループ(虎尾正久、飯島重孝、吉成正雄、嵩地厚、長根潔、松本惇一氏ら)で始まっていた。東京天文台報第44号に関連記事が載っている。その頃のPZTによる時刻決定の観測精度を光電子午儀で向上させようと試みたようであるが、その頃のペンレコーダーの時定数が大きく、光電子午儀の観測は眼視観測に精度が劣っており、期待した成果は得られなかったようだ。左の図を見ると使用された光電子増倍管は1P21である。30mmバンベルヒ経緯儀の光電子増倍管を使った実験に試用されたのも1P21であった。ほぼ同時期に新しい観測方法の開発を試みていたと思われる。新しい試みが全て成功するとは限らないが、新しい事に挑戦する勇氣と気概が必要なことはいつの時代でも言えることである。アーカイブ室では、先達の精魂込めた創意工夫を暴く努力を重ね、そして学び取り、将来への有効活用の努力を重ねている。

写真3が復元された70mmバンベルヒ子午儀である。重厚で美しい。



写真3 復元、展示された70mmバンベルヒ子午儀

そして、その望遠鏡部センターキューにある刻印（写真4）である。この刻印は他のバンベルヒ子午儀の刻印とは趣を異にしている。



写真4 CARL MAMBERG FRIEDENAU-BERLIN の刻印